

【書評】

河合文著 『川筋の遊動民バテッ——マレー半島の熱帯林を生きる狩猟採集民』  
(京都大学学術出版会、2021年)

信田敏宏

バテッの実相を活写したオラン・アスリ研究待望の書である。

本書は、著者の博士論文「生業経済と市場経済からみた環境認識と利用実践——マレーシア半島部・クランタン州上流における狩猟・採集・交易実践を事例として」(千葉大学大学院人文社会科学部研究科、2016年)を大幅に加筆修正し、京都大学学術出版会の「生態人類学は挑む」シリーズ第5巻として刊行されたものである。著者は、2010年から2012年の約2年間、集中的なフィールドワークを実施し、その後も継続的に調査を実施している。遊動性が高く、調査者にとって帯同するのが極めて困難とされる狩猟採集民と寝食を共にしながらフィールドワークを実施した貴重な記録であり、新しい生態人類学の息吹を感じさせる書である。

本書の内容をごく簡単に紹介する。

序では、本書の視座が提示される。領域の統治を重視する近代国家は、鉄道や道路を建設し、大規模かつ効率的な流通網を確立していくが、その過程で、それまで川筋を行き来し、水路を活用してきたバテッの人びとの伝統的な営みは変化を余儀なくされる。著者は、バテッの「日和見フォレージング」、すなわち、状況に応じて活動を切り替える生業スタイルをキーワードに、彼らの暮らしの変化に着目する。マレー半島の先住民オラン・アスリは、18(ないし19)のグループから構成されており、大きく3つのサブ・カテゴリー(ネグリト、セノイ、ムラユ・アスリ)に分類されている。バテッは、そのなかのネグリトに分類され、オーストロアジア語族の言語を話し(マレー語はオーストロネシア語族に属する)、狩猟採集と森林産物の交易を中心にした生業を営んでいる人びとである。ちなみに、ネグリトは、オラン・アスリのなかでもマレー半島に移住した歴史が最も古いとされ、外見的特徴もマレー系の民族とは大きく異なる。

第1章「川とともに暮らす」では、調査地であるクアラ・コ村のバテッの暮らしが紹介される。クアラ・コ村は、クランタン州を流れるルビル川の上流に位置し、タマン・ヌガラ公園に隣接する場所にある。人びとは、政府が設立した定住地クアラ・コ村やその周辺を拠点にして、主に川の上流域にあるタマン・ヌガラの森に入り、狩猟や採集、漁撈などをしながら遊動的なキャンプ生活を営んでいる。11月から1月の雨期にはしばしば洪水が起こるので、人びとはクアラ・コ村などの拠点地にとどまるが、乾期になると森に出かけるという。とはいえ、人びとの居場所は一定しているわけではない。いわゆる「住所不

定」である。彼らは、この地域一帯に広がる熱帯雨林の森を移動しながら、近しい親族などを中心としたグループに分かれて生活している。著者はそうしたグループのなかでも2つのグループと生活を共にしながら、参与観察を行った。人間関係のいざこざに巻き込まれたり、予期せぬ事態が次々に起こったりするなかでの観察はさぞや苦勞が多かっただろうと推察されるが、逆に、著者はそうしたハプニングを楽しんでいるかのようである。例えば、著者のために建てられた高床式の家がいつのまにか他の人たちに占拠されていても、キャンプ生活でヤシの葉などで作った簡易なテントで寝ているときにネズミに出くわしたり、それを食べにくるヘビに遭遇しても、慌てたり動じたりする様子がない。むしろ、遊動的な生活を送るバテツの人びとの「感覚」を身をもって理解することに専念している。モノや所有物に執着しないバテツの人びとの感覚や、同じ皿で食事を分け合いながら食べる子供たちの慣習、さらには著者の掛布や蚊帳、塩や調理油などが、断りもなく他の人に使われる経験など、彼らの生活慣習についてのエピソードの記述はどれも大変興味深い。

第2章「川筋の小王国ヌガラと領域型国家」では、バテツの川との結びつきや日和見フォレンジングについて、歴史的観点から考察している。かつての小王国時代、すなわちヌガラ世界においては、河口に暮らす権力者が川筋に沿ってその影響力を広げる政治形態がとられていたが、それが植民地時代を契機に領域型国家へと変貌していく。ヌガラ世界において、バテツをはじめとするネグリトのグループは、森の奥深くではなく、マレー人の居住地から遠くない場所に暮らし、マレー人との交易や農耕の手伝いを対価として、刃物や食料を入手していたという。つまり、当時のバテツをはじめとするネグリトは、外部から孤立して狩猟採集に依存した自給的生活を営んでいたのではなく、長期にわたって農民と交易をしながら暮らしていたのである。そうした外部との関係性は、植民地時代を経て領域型国家に移行すると、大きく変化していく。特に影響が大きかったのは、非常事態宣言期、政府がマレー農民をこの地域よりも下流の地域に移住させたことであった。共産ゲリラの影響を回避するためである。結果、マレー農民との交流を失ったバテツは、新たな生業スタイルを身につけざるを得なくなったのである。

第3章「遊動生活と川筋世界の変容」では、著名な人類学者であるエンディコット夫妻の調査結果を参照しながら、1970年代、マレー農民との交流を失ったあと、狩猟採集や放置型の農耕、トウ（ラタン）の交易によって生活していたバテツの暮らしを記述する。続いて、政府による陸路建設と領域区画型の環境改変（プランテーション開発やダムの建設）が進んだ1980年代の変化を概観している。

本書の中核部分となる第4章「継承される生活と動植物利用」では、著者がフィールドワークを実施した2010年代のバテツの暮らしが紹介されている。狩猟、採集、漁撈（川での魚釣り）、放置型の農耕などで得られる動植物の利用については細かな記述がなされ、キャンプ生活でのテントとなるハヤ作りは、実際に製作に携わり、そこで寝起きした著者ならではの視点で描かれている。また、バテツの食事や食物規制・禁忌にまつわる話、狩猟・採集・漁撈の様子などは、どれも臨場感あふれる記述と写真によって、読み手の好奇心をくすぐり、バテツの世界に引き込まれる内容となっている。さらには、著者が吹矢の

毒にあたり、1週間も寝込んでしまった話や、ドリアンを採集するのに、木を切り倒して実を集めるといった方法など、驚かされるエピソードも紹介されており、バテッの暮らしをイメージしながら面白く読み進められる。

第4章の後半は、森でのナビゲーション技術やバテッの環境認識について考察している。バテッは、川筋の行き来や丘や山の上り下りによって感じる身体感覚を独特な言葉で表現しながら、自らの位置や方位を独自の方法で確認する。著者は、狩猟採集活動について行き、丘の急斜面を上り下りし、雨が降って足元の悪い森の道を歩くなどして、バテッの人びとの身体感覚を自らの身体で感じ、言語化しようとしている。そして、ナビゲーション技術だけでなく、コウモリやサル、カメなどの獲物にまつわる禁忌の事例から、バテッが理解する水陸の空間の秩序や環境認識のあり方について考察を進めている。

第5章「陸路と市場経済」では、道路が建設され、森が切り開かれていき、バテッの森が減少していく一方で、道路を利用して、バテッ自身が近くの町やプランテーションにある店などで食料を購入したり、外から行商人が村を訪れたりするなど、現金を使う機会が増えた現在の状況を記述している。グローバルな市場との関係で需要が高まり、トウや沈香などの森林産物や、高級魚やカエル、センザンコウなどの獲物を現金と交換する頻度も増えていき、そうした現金経済への依存が増すにつれ、従来の社会関係やモノの分かち合いにも変化が生じているという。例えば、現金で購入したコメや砂糖などの食料は、従来のような分かち合いや貸し借りがなされない。また、年長者は「この川の下流にあの町がある」といったように川筋で町との関係を理解するのに対して、若い世代は道路によって距離感や町の位置を認識しており、水路から陸路への変化は彼らの空間認識にも影響を与えている。

終章「バテッの暮らしが問いかけるもの」では、本書で明らかにしたバテッの暮らしの変化と現在の姿をヒントにして、地球環境問題や日本をはじめとする私たちの近代的な暮らしを、より広い視野から考察している。移動生活をやめ、定住生活に移行した人類は、領域区画型の環境利用にシフトし、それが国家制度と結びついて広がることで、結果的には環境に大きな負荷をかけている。以下、文章を引用する。「雨期が明けると森へと移動し、花々を楽しみつつ魚やカメを獲って食べる。そして花の開花具合から、森の果実の結実を予測する。拠点にいても資源の探索に出かけ、得られた資源を現金に換えてコメを購入する。またドリアンが結実したとなれば、そこへ移動して日々ドリアンを食べて過ごす。バテッの暮らしは、人間が他の生物に依存して生きる存在であることを再認識させる」(本書：304)。

バテッだけに限ったことではなく、森と共に生きてきたオラン・アスリの生活は、1980年代から開発の波が押し寄せ、生活の大きな転換を余儀なくされている。森のテリトリーを移動しながら、自然と共存して生きてきた彼らは、その多くが定住を強いられ、生業や慣習を変えて生きている。オラン・アスリだけでなく、近代化した私たちの生活も過去に戻ることはなく、さらなる発展を目指し、より自然との距離がはなれていくであろう。バテッの人びとのこうした暮らしがいつまで続くのだろうかという心配な気持ちと同時に、

いつまでもこの豊かな森で暮らしてほしいと願わずにはおられない。

本書は、人類が永永と営んできた「自然との共存」と「分かち合い」の暮らしに息づく真の豊かさに、改めて気づかされる書である。バテツの人びとの感性や感覚を自身のものとするべく彼らに溶け込む一方で、研究者としての冷静かつ客観的なまなざしを忘れず、過酷な生活を続けた著者のフィールドワークは感嘆に値する。また、掲載されている数多くのセンスある写真は、著者の冷静さと客観性がよく現れており、本書の内容をより具体的かつ臨場感あふれるものとしていることも付け加えておく。

最後に、本書では処々に著者の心のうちが吐露されているのだが、フィールドワーカーとして共感できる部分が多々あり、時には1人笑みを浮かべながら、時には大きくうなずきながら読ませてもらった。評者にとっては、25年余り前、長期フィールドワークを実施した際の思い出が様々に蘇り、ノスタルジーを感じずにはおられなかったが、これからフィールドに出る学生諸氏には、ぜひ一読してもらいたい書である。

(のぶた・としひろ 国立民族学博物館)

2023年6月27日掲載決定